

地域福祉文学大賞

部門賞（民生委員部門）

民生委員・桑名シラネの初仕事

オオバレイコ

令和5年度に全国公募した「地域福祉文学大賞」の受賞作品です。
作品の著作権は、社会福祉法人新潟市社会福祉協議会にあります。

新潟市西区社会福祉協議会

一 民生委員・桑名シラネ誕生

本当に何たる不運か！自転車を漕ぎながら桑名シラネは毒づいた。

平日の夕方五時、いつもだったら、パートで働いている安売りスーパーは大忙し、レジの列の割り込みを取りなしたり、早く刺身の値引きシールを貼らせようとする客への対応で大わらわの時間帯で、時給九百八十円で働くには割に合わないなどとぶつくさ文句を言っているのだが、今の不運に比べたら、平穩この上ない日常にちがいない。

そもそも、今日、勤め先の「スーパー岸川」が、防災設備の不具合で、年中無休のはずが急遽休みになったので、ふだんサボっている家の庭の草むしりでも大人しくやっておけば良かったのだ。それが、冷蔵庫のワキ腹に磁石で貼っておいた「町内会のお知らせ」に目が行ったのが間違いの元だ。いつもだったら、パートで忙しいと言い訳し、町内会の集まりなど、皆勤と正反対の全欠席で通してきたのだ。たまたま仕事が休みになってしまったので、ちよいと顔だけ出して普段の近所づきあい不精に頭下げたおこうかなどと殊勝なことを思いついたのが運の尽きだ。

町内会の集まりは近くの公民館（シラネはこれまで入ったことがなかった）で、会場の会議室に顔をのぞかせると、すでに集まっていた町内会の皆々に大歓迎された。生まれてこの方、最大限にモテたくらいの勢いだ。多分町内会長とおぼしき六十代くらいの男性が手招きしてパイプ椅子を勧めてくれた。袈裟のようなものを着ているので僧侶のようだ。

「岸川三丁目の桑名さんだね？よう来てくれました」

「や、奥へ行って座ってください」

白髪の割烹着を着ている女性がニコニコ笑いながら、紙コップを渡し、ペトボトルからお茶を注いでくれる。さらに、他の女性達が、持ち寄ってきたと思われるアラレや漬物を紙皿に取り分けてくれた。な、なんだ、この歓迎ぶりか？と思いつつ、とりあえずお行儀良く愛想笑いを浮かべているうちに、本日は町内会の重大な人事を決める場だということに気がついた。

「・・・ということ、桑名さんを、本町内会から来年度の民生委員に是非推薦してえです」

町内会長は、満面の笑顔でそうのたまった。

はあっ！？民生委員！民生委員って、町内会長とか町の世話役が務めている役職では？自分は他人様の面倒見たりするガラではないし、そもそも、自分の

ことで精一杯で余裕がないっていうのに、何の冗談か、何の因果でこんなことになるんだ？

「あ、あのですね、本当に申し訳ないんですけど。わたし、とてもとても、そんな難しいお仕事お引き受けできません」

シラネ的には、できるだけ感じ良く丁寧に、しかし、断固とした意志をにじませる口調を心がけて言ってみた。（お茶やら、あられやら、漬物など口にする前に断れば良かった。いや、そもそも、こんな場面に遭遇しないように来なければ良かったのだ。）

しかし、町内会長はじめ、その場にいた方々は、シラネの断固とした固辞を全く意に介さず、ぐんぐん話を進めていくではないか。

「なあに、大丈夫。今は、民生委員は、なるべく若い人、女性になってほしいんだ」いや、やめて。私はなりたくない！

「スーパー岸川で元気に働いているの、知ってるよ」

「そうそう、レジの列に割り込んでる連中にビシッと注意してるの。スカッとするわ」いやいや、それは仕事ですから。

「毎日、パートに出てるんで。本当に時間もなくて、……。あのー、民生委員って、町内に古くからおられる方とか、学校の先生やってた方とか、適任者がいらっしやるのでは・・・」難を逃れようと口にした弁解で墓穴を掘った。

「おお、そうそう。桑名さんの父上は、長う民生委員を務めてくださった」シラネは舌打ちしたい気持ちになった。広いだけ取り柄の座敷の壁に掲げている穏やかに微笑む亡き父の古い肖像画を思い出した。地元の教員を定年退職する直前に急逝した父は、現職時代の若い頃から長く民生委員を務めていたのだった。

「桑名先生は、本当に立派な方だった」

部屋にいる全員が一斉に首をブンブンと頷く。さらに、次から次へと「桑名先生の活躍の思い出」を語り出すではないか。シラネが知らない生前の父のエピソードが次々に語られる。町内の行方不明になった認知症のおばあさんと手をつないで帰ってきた話、片付けを手伝ったゴミ屋敷の階段の糞便に足を滑らせて転げた話等々。

古い肖像画のようにセピア色にかすれていた父の表情が色鮮やかによみがえってくる。お父さんは、こんなにも町の人たちと濃密な時間を過ごしたのか。わたしに対してはどうだったか・・・十年前に、たった三年足らずで東京の結

婚生活に終止符を打ち、逃げるように新潟に出戻った自分に対し、どうであったか。あれこれと多くは語らず、少しばかり悲しそうな眼をして、ただただ慈しみ深く受け入れてくれたのではなかったのか・・・

「じゃあ、そういうことで。桑名さんを民生委員として推薦することに決定です」

はいっ？うっかり父の思い出に浸っている間に町内会の最重要人事が決まっていた。

二 望まざるお役目、望まざるお客

シラネは、さきほど、市役所で行われた民生委員委嘱状伝達式で手渡されたばかりのバッジをまじまじと見つめた。四つ葉のクローバーをかたどった、中央には「み」という字が柔らかくデザインされている。民生委員だから「み」とは安直すぎるのではなからうか。うっかりするとなくしそうな小さな銀色のバッジがやたら重く感じる。

だまし討ちのような町内会の推薦を経てからは、あれよあれよという間に手続きのジェットコースターに乗せられた感じだ。想定外だったのは、パート勤めするスーパー岸川の店長だ。店の忙しさを理由に「そんな話ガツンと断っちゃまえ！」とカツを入れられるのではないか、そうしたらそれを理由に「やっばり無理でした」と断っちゃおうと、ひそかに思いを巡らしていたところ、「お、そりゃあいい話だ。何なら勤務時間中に民生委員の活動入れてもいいぜ」と太っ腹なところを見せたのだ。

もともと店長の思惑は、すぐに露呈した。その日の夕方、鮮魚売り場で値下げシールをペタペタ貼っていると、事務所に呼ばれた。シールの添付を待ちかねていた客らから「ちよっとお、どこ行くの？」「貼ってってよ！」の声を背中に受けながら事務所に入ると、「お、来たか」と店長が椅子から立ち上がった。もう一つのパイプ椅子には小さな老婆が背中を丸めてちよこんと座っている。

「何ですか、今、値下げシール貼ってるところなんですけど」

「これさあ」

店長がアゴで指し示した事務机の上には、メロンパン、パリパリせんべい、カップアイスクリームが乗っている。

「はあ」

シラネの間の抜けた返事を気にするふうでもなく、店長は続けた。

「万引きだよ、万引き」

まあ、このシチュエーションなら、誰がどう見たって万引きの現行犯が事務所に引つ立てられた構図だ。問題は、なぜ、パート作業中の自分が値引きシール貼りという夕方のビッグイベントの最中に呼び出されたかだ。

「桑名さんさあ、ちょっと話してみてよ」

いやいや、それはパートの仕事じゃないでしょ。売り場責任者とか警備とか、適任者いるでしょ、わたしより給料高くて責任ある仕事している人たちが！それより、万引きは犯罪だ。警察に届けて一件落着ではないのか。

「万引きは犯罪だ。警察に被害届を出すという方法も、もちろんある」

シラネの心を見透かしたような店長の言葉に老婆の小さい肩がビクリと震える。

「だが、警察に届けると、いったいどれだけ手間がかかると思う？」

それは知ったことではない。シラネは今まで警察の世話になったことはない。

「この品物、ええと、合計で、えっと」

それくらいはわかるので、シラネは店長の言葉を引き取った。

「税込み二百八十五円ってとこですかね。」

「そう。二百八十五円、それくらいのことと、警察呼んで来てもらって、岸川署へ行って被害者調書とられていったい何時間ムダにかかるんだって」

「はあ」

じゃあ買い取りか。多くのスーパーでは万引きが発生して捕まえたとしても、品物を買収らせて終わりという対応は珍しくない。それなら、パートの自分なんかわざわざ呼び出さないで、さっさと買い取らせて、店を出禁にすると言い含めたらどうか。

「それがさあ、この婆さん、文無しだったよ」

へっ？シラネは老婆をまじまじと見つめた。そんなに粗末な身なりをしているわけではない。刺繍の入った巾着と、大ぶりの布製のエコバッグを持っている。エコバッグに万引きの戦利品を入れてたのだな。

「お財布、見せてくださいね」

ああ、わたししたら、余計なコトに首を突っ込もうとしている。と思いがら、シラネは老婆がおずおずと差し出した巾着を受け取った。

「じゃ、後は頼む」

おい！押しつけるのか！店長は、明らかに安堵した様子で事務室を出て行った。足取りも軽く、口笛さえ聞こえてきそうだ。

「開けますよ」

やや手垢じみた巾着を開けて机の上に中身を広げた。十円玉が三つ、五円玉が一つ、一円玉が二つ。三十七円が全財産ってか。

「これだけ？」

シラネが呆れたように尋ねると、老婆は身をますます小さくした。このまま、どんどん小つちやくなつて、やがて消えてしまうのではないかしら。

「はい、申し訳ございません」

なぜ金も持っていないのに、スーパーでメロンパンとパリパリせんべいとカップアイスを手取るのか。シラネには全く理解不能である。が、同時に、アイスクリームが溶けそうなのが、目下いちばんの懸案事項だ。他の二点は売り場に戻せるだろうか。しかしアイスは無理だな。ああ、溶けてしまいそう。シラネは、エプロンのポケットから百円玉をつまみ出した。

「あのねえ、アイス溶けそう。奢ってあげるから、とりあえず食べちゃって」

老婆の眼が驚いたように見開いた。

「いいから。溶けちゃうから、早く」

シラネは、カップアイスのカップを取り、机の上に無造作に束ねられていたプラスチックのスプーンを一つ引き抜いて手渡した。

「申し訳ございません」

一口食べ始めると、それまで見せていた躊躇が嘘のような勢いでアイスクリームをかきこんだ。

三 桑名シラネの戸惑い

全く想定外である。あの老婆―山田トモ子、七十二歳と名乗っていた―のことはすっかり忘れていたのだ。今の今まで。百円のアイスクリームを奢ってやって、「こんなに甘くておいしいものは何十年ぶりに口にいたしました」「ありがとうございます」などと、大げさに何度も頭を下げながら店を出て行ったのだ。「もう万引きなんて絶対しないでね」というシラネの言葉に、山田トモ子は「はい、もちろんでございます」と涙ながらに誓っていたではないか。

「桑名さん、桑名さん、事務所に店長コールです」

と間延びしたアナウンスで事務所に行くと、二日前と同じ風景が展開していた。メロンパンではなくあんパンとパリパリせんべいとカップアイスクリーム、と丸イスに小さくなっている山田トモ子。

デジャブ・・・シラネは困惑した。いったい何が起こっているのか。が、困っているばかりでは済まないようだ。

「じゃあ、桑名さん、後は頼むわ」

「は？」

後は頼むわ、という店長の言葉にシラネは言葉が出てこない。面倒を起こす山田トモ子にも、面倒を押しつける店長にも言いたいことが山ほどある。何でわたしが！という言葉が頭の中を渦巻く。

「出禁ということでき、じゃ」

店長は、やれやれ、一件落着とばかりに事務所を出て行ってしまった。

ああ！アイスクリームが溶けそう。シラネは机の上に置かれたままのカップアイスを睨みながら思った。もう奢ってやるもんか。売り場に戻すのは気が引けるので、事務所のスタッフ用の冷蔵庫に突っ込んだ。これは、わたしが買い取って後で食べよう。

山田トモ子は、アイスクリームが冷蔵庫に収納されるサマをチラリと上目遣いに見た後、黙り込んでいる。前回の件で、シラネは、山田トモ子の名前も住所も聞き取った、もう万引きなんかしないでねと念押しもした。それ以上、何をどうしたら良いというのか。

そもそも、民生委員を引き受けてしまったから、こんな面倒な事態の收拾を押しつけられたのではないか。これは理不尽なことだ。あの、人の良さそうな町内会長の様子をいまいまいしく思い出した。クソ坊主！

そういえば、何でも困ったら相談しなさいねとか言っていたな。口先だけのこともかもしれないが、相談してやろうじゃないか。店長も、勤務時間中に活動OKとか調子の良いことを言ってたから、店を抜けても文句は言わせないわ。

シラネの財布の中に、小さく折りたたんだ紙があった。あのとき、町内会長が「何かあったら電話してくんなせね」とくれたものだ。何かある、なんて想像もしていなかった。勢いをつけて町内会長に電話を入れた。「・・・寺でございませ」と穏やかな年配の女性の声が聞こえた。

「あの、桑名と申します！」

「ああ、新しく民生委員になられた桑名さんですね。ごくろうさまです。主人に代わりますね」

え、ごくろうさまってねぎらわれてしまった。わたしは文句を言おうと思って
いたのだ、こんな難しいことはできませんと。勢いがそがれたではないか。
「やあやあ、どうしましたか」

町内会長兼住職は、シラネの電話を予期していたとばかりに楽しげな声色だ。
「電話で話すのもナンなので、お寺にいらっしやいよ」

シラネの電話を迷惑がるどころか、来訪を歓迎するふうな口ぶりである。シラ
ネとしても、小さく縮んだような山田トモ子の横で、二回の万引き事件のことを
あれこれ責め立てるように話しくいので、「今から行きます！」と答え、とり
あえず、トモ子を放免することにした。自転車を漕ぎつつ、「勤務時間中なんだ
けどなあ」とつぶやいてみた。お寺は十分足らずだ。

「あのですね、わたし、本当に困っています」

お寺の本堂脇の社務所で、勧められた冷たい麦茶を一気飲みして言った。

「そうですか、なるほど」

住職は、うんうんと頷きながら麦茶を足してくれた。シラネは話しながら、わ
たしは何にいちばん困っているのだろうとわからなくなった。万引きを繰り返
す山田トモ子に困っているのは事実だ。だけど、万引き被害に遭っているのはス
ーパー岸川であって、パート従業員の自分ではない。警察に通報するのを面倒が
って新米の民生委員のシラネに事態の收拾を押しつける店長もけしからん。

「店長は被害額二百八十五円のために警察であれこれ手続きがたいへんだって
いう考えなんです」

「桑名さんはどう思うのかな」

「・・・わたしですか、うーん、あんまり考えたことないですけど」

万引きは犯罪ではないのか。犯罪をしたら、警察に通報されて罰を受けたりす
るのが普通なのではなからうか。

「罪を犯したら、処罰されるのが当たり前だという考えもあるわね。桑名さんは、
そう思っているのでねえですか」

「そうですねえ、そうです」

子どもの頃から、罪を犯すということは言語道断で、絶対に許されないことだ
と思っ生きてきた。

「そうだねえ、社会でちゃんと生活している人たち、そう思うよね」

社会でちゃんと生活している人たち？わたしも、その「ちゃんと生活している人たち」に含まれるということ？夫の不貞で離婚して郷里に出戻り、両親が残した広いだけ取り柄の古い家にひとりぼっちで住んでいる四十二歳の女、安売りスーパーのパート勤めで細々と暮らしているわたし、彼氏もいなけりゃ、取り柄もない。元夫は、不貞が発覚しても、取り繕うこともなく（潔いと褒めてやりたくらいあっさり）「だってさあ、シラネって女という感じじゃないんだよね」と悪びれることもなく言い放ったのだ。不貞をした方が悪いというのが常識なのではないか。不貞をした方は、バレないように振る舞い、はからずも発覚してしまったら、あれこれと弁解したり、「申し訳ない」と、しおらしく謝罪するのが常套というものではないか。そして、「金輪際会いませんから」と相手の女との即時離別を誓って見せたりするのが礼儀というものなのではないか。

それなのに、「シラネって女という感じじゃないんだよね」とは何事か。元夫の言葉は開き直りのようでもあるが、その言葉のはしに、かすかに勝ち誇ったような響きを嗅ぎ取ったのだった。元夫を褒めてやるとしたら、シラネの心根を理解しているということかもしれない。シラネが、このような場面（妻の不在に乗じて、夫婦の寝室に浮気相手連れ込んでよろしくやっているという場面のことだ）で修羅場を演じるような女ではないこと、つまり喚き立てたり、女と乱闘したり、慰謝料を要求したりなどしないと正しく認知していたということだ。わたしは、「そういうことなら、わかりました。離婚届に判を押して送りますね」と、この上なく冷静に言い放ったのだ。

一度口から放たれた言葉は二度と戻らない。言い放ったからには、家を出て行くしかあるまい。その場で、一番大きいスーツケースに、とりあえず目に付いた自分の物を乱暴に突っ込んで、「じゃあね」と足音を踏みながら出てきた。わたしの「じゃあね」に対して、元夫は「おう」と言ったのだった。何が「おう」だ。普通に出かける妻の「行ってきます」への言葉のように軽いではないか。元夫の悪びれない態度には腹を立てたが、口の片端をかすかに上げた表情は昔から大好きだった表情だ。こんなにも簡単に、別れというのは成立するのか・・・一方、女の方の表情は不思議なくらい覚えていない。確かに、寝室の毛布にくるまっていたのを睨みつけたのに。ベッドの横に丸まっていた毒々しい色のパンティだけがくつきりと記憶に刻みつけられた。そう、赤い光る素材のパンティ。申し訳程度の大ききの布の部分と複雑にこんがらがったヒモで構成されたパン

テイ。いつも自分が履いている二枚で千円のショーツを思った。そう、これはパ
ンティではなく、ショーツ、綿の。お腹をすっぽりと包み込むような安心ショ
ツだ。ソレとコレが同じ下着の仲間ということが信じられないわ。

そのようなトンチンカンなことをフツフツと思いつながら郷里に戻ってきた自
分。それが社会でちゃんと生活している人たちの仲間に入れてもらってよいも
のか。末席を汚してよいものかね。

四 桑名シラネの初仕事

町内会長兼坊主に、また丸め込まれたのかもしれない。シラネは、何やら釈然
としない思いを持ちつつ、自転車を漕いだ。途中で電話したスーパー岸川の店長
からは「おお、初仕事か。しつかりな!」「今日は、このまま仕事上がりでいい
からな」とゲキを飛ばされる始末である。店長よ、いつから、そんな太っ腹にな
ったのか。どんだん外堀を埋められていく心境である。このまま山田トモ子の家
に向かうしかないではないか。

手帳に走り書きした住所を頼りに、川沿いの道を一本奥に入り、古びたしもた
屋が並ぶ商店街の裏道に入り、さほど苦勞せずトモ子のアパートを見つける
ことができた。寂れたあたりの中でも、ひとときわ目を引くオンボロアパートだ。
壁にへばりついた郵便受けの数から見て、アパートには六部屋あるようだ。かる
うじて読める「コーワ荘」という字を確認する。

シラネは、「コーワ荘」というより「コワレ荘」(壊れそう)だよなあなどと呟
いてみた。いまだに民生委員という仕事を理解しておらず、当惑する自分に茶々
を入りたい気分だ。

トモ子の部屋番号は103号か。さびだらけの郵便受けは、103号以外はチ
ラシやらゴミ袋がギッシリと詰め込まれて飛び出している。部屋はおそらく一
階のいちばん奥だろう。何をどうしたらよいか、正解も持たず、ノウハウも持た
ないが、突入するか。

アパートの廊下にも空き缶やら割り箸が突き出たコンビニ袋だとか元の形状
不明のプラスチックゴミが散乱している。なぜ、何をどうすればこんなに散らか
るものなのか。人が生活を営むというのは、要るモノを整え、要らないモノを廃
棄して暮らしていくものではないのか。シラネは、思うともなしに自分の生活を
振り返る。ゴミは分別する、資源ゴミはわかりやすく分類して決まった日に。牛

乳パックは洗って干してスーパーへ。そんなシラネについて、元夫は、「めんどくさい女だな」とか「なんだよ、エコとか。自分一人がんばっても自己満足だろ」と言いやがった。

ああ、いかん。気を取り直していこう。

103号の前に立ち、赤茶けた呼び鈴を押しても音がしない。壊れてるのか、電気が通っていないのか。トントンとドアをノックしながら声をかける。

「山田さん、いますかあ？スーパー岸川です！」

名乗りを上げる瞬間まで、何と名乗ればいいか考えてもいなかったが、口をついて出たのは「スーパー岸川」だった。「民生委員」というのが正しいのだろうが、口に出すのがはばかられた。そもそも、民生委員を名乗るほど自分は何も知らないのだ。

部屋の中から、人の気配がして、ドアが用心深い様子で細く開いた。いや、そんなに警戒しなくてもこのオンボロアパート、絶対セールスとか来ないでしょ。ドロボーも入らないでしょ。

小さく顔を覗かせた山田トモ子は、シラネを認めると、はっと息を飲んだ様子だ。思い出しました？二回も万引きの現行犯でとつかまったんだから覚えてるよね。

「あの、この節は」

などと、ごによごによ言っている。

「えっと、ちよっと中に入れてもらっていいですか？」

たぶん、入れてもらってもいいはずだ。本日の万引きの取り調べを途中放棄してたのだから。

「はい、はいっ、どうぞ、どうぞお入りください」

細く開けられていたドアが広く開いた。ドア下の数十センチ四方の土間のような一角が玄関ということなのだろう。トモ子の古びたサンダルがきちんとそろえて置いてあるので、その横に自分のスニーカーを脱いで上がる。入ったところに3畳ほどの台所、その奥に四畳半くらいの和室。ぶしつけにならないように見渡したが、それだけである。部屋の隅にせんべい布団と毛羽だった毛布が、きつちりと四隅を整えてある。

ちやぶ台の代わりだろうか、部屋の真ん中に小さな段ボール箱をひっくり返してある。トモ子は、その前にちょこんと正座してうなだれている。シラネは自分が悪いことでもしているような、おそらく三十も年上の老婆をいじめている

ような錯覚にとらわれた。なんで、わたしがこんな気持ちに苛まれなくてはならないのかなあ。

「あのですね」と言いかけて、シラネは聞くべきこと、語るべき言葉を持たないことに気がついた。

「はい」

とトモ子が小さな声で答える。えつと、ああ、そうだ、住職が持たせてくれた和菓子があった。お寺のお供え物だな、きつと。

「もらい物なんだけど、食べます？」

シラネが段ボール箱の上にカステラ、塩大福、ヨウカンを並べると、トモ子の目は大きく見開いた。

「いただきますもよろしゅうございますか？」

「どうぞ、どうぞ、食べて」

よろしゅうございますか、という上品な言い方とは裏腹に菓子里にむしやぶりとく。カステラを食べながら、塩大福の包装を破り、塩大福を食べながらヨウカンの包みを開けるといった具合だ。そんなに空腹だったのか？世の中に、こんなふうに食べ物にむしやぶりとく人がいるのか？

シラネは部屋の中を見回す。家具のない部屋の隅にきつちりと四隅を整えてあるせんべい布団と毛布。不自然なくらいキッチリと。このたたみ方、この布団のたたみ方って、どこかで聞いたことがある。

あれは、亡き父から聞いたことではなかったか。長く民生委員を務めていた父は、相談者の個人情報について話すことは一切なかったけれど、いつか言っていたのではないか。「刑務所へ参観に行つてなあ、驚いたよ。居室の布団がびっくりするくらいキッチリ四隅を合わせて畳まれてるんだ。そんな決まりなんだなあ」

「山田さんね、違つたらゴメンだけど、あなた、刑務所に入つたことあるのかな」

トモ子は口元からヨウカンを離した。おどおどと答える。

「ご存じでしたか」

ピンポンだ。亡き父が遠くで頷いたような気がした。

「うーん。そしたらね、やっぱり、万引きつてまづいでしょ。刑務所なんかに戻りたくないでしょ」

刑務所なんかには、と言つてみた割にシラネは刑務所のことなどちつとも知ら

ない自分を恥じた。とりあえず、社会の中でいちばん行きたくないところ、なのではないか。しかし、トモ子は「はい、金輪際行きたくはございません。もう万引きは決していたしません」と答えるかと思いきや、シラネの思いとは裏腹に、深くて長いため息をついた。

「もう二日何も食べておりませんでした。電気はつきません。水はまだ出るのでずっと水ばかり飲んでおりました」

二日間って、あの一回目の万引きのときアイスクリームを食べさせたのが最後ということ？その後、この小さな老婆は、何も口にしていないということなのか。

「どうしてそんなことに・・・」

シラネは言葉が続かない。この現代の日本で、なぜ何日も食べ物や口を口にする人がいるのか。おかしいではないか。シラネは猛烈に腹が立ってきた。これは許されないことだと思う。これは不正義だとも思う。

わたしは無知だ。教えてください、お父さん。シラネは唇をかみしめ、誰に怒りをぶつけていいのかわからず、自分の無知をののしった。

五 エピローグ、そして続く

「本当にありがとうございました」

山田トモ子は更生保護施設「岸川寮」の玄関でシラネに深々と頭を下げた。トモ子は今日から、この寮の一室をあてがわれることになったのだ。

あのあと、シラネは興奮冷めやらぬまま、町内会長兼住職のお寺にとつて返し、まくし立てたのだ。「かわいそうではないか」と。住職は、シラネの再来を予想していたかのように、楽しみにしていたかのように、「そうですか、そうですか」「なんと！」「それは気の毒に！」と言いつつ、首をかしげた。「刑務所から出所した人を援助する制度とか施設があるようですよ」と言うではないか。えっ、そうなの？

金もなく、身寄りもないからトモ子は水ばかり飲んで飢えていたのではないか。そんな御立派な制度があっても、いちばん困っている本人が知らされていないではないか。それに対してもフツフツとこみ上げてくる怒りのままに、「じゃあ、山田さんを、その制度とやらを活用して施設に入れてあげようじゃないですか」と言い放ち、住職とともに市役所へ乗り込んだ。対応が遅ければ、『み』のバッジ交付してそれで仕事終わってるんじゃないよ！」とでも言おうかと思

込んでいたが、市役所の対応はすばやく、「刑務所を出所した方の援助施設ですね！」と即答するではないか。

トモ子のわずかな荷物を運ぶ手伝いをしたシラネも、スーパー岸川の真裏にある二階建てのこの建物に初めて足を踏み入れた。毎日自転車で前を通っていたし、時々、店長から言われて、賞味期限が迫るパンや余った野菜を届けていた場所だ。いつも裏口で「スーパー岸川です」と届けるだけで、この建物にどんな人たちが暮らしているか関心も持たず、知らなかった。何も知らなかった自分に舌打ちしたくなる。わたしは本当に何も知らなかったんだ。

「父上にそっくりですなあ。正義感の強いお人だった。信念の人だった」

住職が目を細めながら言うのではないか。いや、わたしが知っている父は穏やかでわたしのように声を荒げたことはなかった。遠くの父がにやりと笑った気がした。

「桑名さーん、事務所へお願いしまーす」

また呼び出しのアナウンスだ。今度はどんな事態が発生したのだろう。シラネは、小走りに事務所へ急いだ。(了)